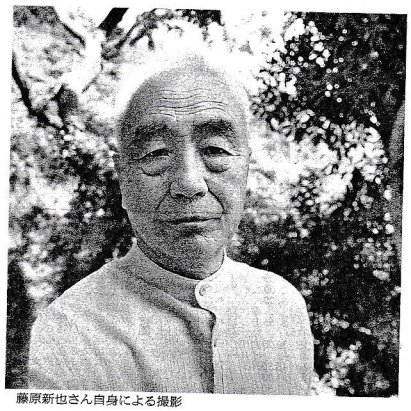
いま聞く Interview

藤原新也さん　写真家・作家

コロナ禍 人々は変われますか

写真家の藤原新也さん(76)は1960年代のインドを皮切りに、世界中を旅して文明や社会、人のありようを見つめてきた。そのまなざしは鋭く、温かい。新型コロナウイルスで揺れ動く世界を、日本をどう見ているのだろう。(編集委員・秋山訓子)



藤原新也さん自身による撮影

ふじわら・しんや　1944年、福岡県門司市（現北九州市）出身。写真家・作家。20代からアジア各地、アメリカなどを長く旅する。著書に「印度放浪」「全東洋街道」「アメリカ」「東京漂流」「メメント・モリ」「渋谷」など。最新刊は「日々の一滴」。デジタル音声配信で「新東京漂流」を開始。限定会員制ウェブサイト「Cat Walk（キャットウォーク）」主宰。

藤原さんが87年に著した中編小説「ノア」は、インドの「タラ・ビティ」という森の聖地を題材にした幻想的な物語だ。その森には猿がすむが、一定数を超えると次の鳥に変身して飛び立ち、森は滅びる――。

「文明が飽和に達するさまを森と猿に託して書いたんだけど、いま、人間社会と自然がこの飽和状態に来ているように思える。この小説を書いた87年の世界の人口は50億人。2020年は78億人。この増加の加速はすさまじい。30年そこそこで1・5倍になっている」

自分の中でさびついていたもの 磨けたら勝ち

写真には「色飽和」という言葉があるという。色を鮮やかにするために彩度を限界まで上げた状態だ。

「ここ数年、テレビ画面がその色飽和を起こしている。視覚刺激の競争原理が働き、旅ものなどの風景映像の、特に緑の彩度が極端に上げられ、色飽和を起こしている。音楽にも飽和現象が見られる。個人の小さな声が消え、AKB48がそうであるように集団の大音量の時代となった。言葉もそう。少し前まで『超』がやたらはやったけれど、今は『神』。神の上はもうないよね。政治の世界も9・11以降、強者がゴリ押しする独善が横行し、息が詰まりそうだ。自然ではオーストラリアの森林大火災が示すように、温暖化も臨界に来ている」

文明も自然も臨界

藤原さんは房総に家を持つが、最近、動物と人間の距離が極端に近くなっていると言う。

「猿の出没は30年前からだが、ここ5年、鹿とイノシシが現れ、それでも一定の距離はあったけど、この前、車で走っていたら、鹿の群れが前をよぎってミラーと接触した。距離が臨界に来たということで、これは衝撃だった。そもそもウイルスは人間が動物との距離を縮めたところから発生しているわけでしょ。なんか妙に象徴的でね」

藤原さんには、文明や自然が臨界点に達したところで起きたウイルス禍は、人間社会や自然に正常に戻ろうとするホメオスタシス（恒常性）が働いているようにも見えてしまうという。

「温暖化を食い止めようと日本を含む世界各国はCO_2の削減目標を定めているが、とつぜん現れた新型コロナウイルスは閉鎖システムが働いたかのように世界をロックダウンさせ、ひょっとすると$CO_2$80%くらいの削減を強制しているんじゃないか。生活が逼迫している人がたくさんいて胸が痛むが、巨視的に見ると、今は新緑の季節だけど首を絞められっぱなしだった自然が深呼吸をして鮮やかさを増しているようにも見える」

増長する被害意識

騒動が収まった時、世界は、人々は変わるのだろうか。

「いや、元の木阿弥になる可能性が強いと思う。人間の業は深い。その業の深さが新型コロナウイルスを発生させたわけだからね」

日本は2011年に、大震災と原発事故という未曽有の出来事を経験した。その前後で、人々は変わらなかったのか。

「人の心はネガティブに変わった。戦争や災害は人の心に被害意識を植え付ける。当時盛んに叫ばれた『絆』という言葉は消え、今は逆に被害意識から生まれたヘイトスピーチのような他者への過剰な攻撃や、その一方で日本賛美があふれている」

ウイルスに感染した人への差別も起きている。

「東日本大震災と原発の被害意識が癒えない中で、再び襲ってきたコロナ禍がさらにそういった被害意識を増長させてしまう恐れもある。海外では医療関係の人を助けようとする動きがあるが、この日本の一部で医療関係者を差別するようなとんでもないことが起こっているのは、積み重なるダメージに心が壊れているという見方もできる」

人恋しさを蓄える

希望が見えないが……。

「いや、今の巣ごもり生活から生まれるものもあると思う。記者にはストレスがたまる毎日だ。自由に出かけられず、人とも会えない。

「だが、飽食時代の欲望全開の自分を見つめ直す禁欲生活に入っているという見方もできる。人間関係で言えば、これだけ人恋しさを蓄えられる状況はないわけでしょ」

それはいいことだろうか？

「今ほど、人とのつながりや人の温かみのありがたさを実感するときはないだろう。さっきは元の木阿弥になる可能性が強いといったが、プラスに転じる可能性もある。被害意識も生まれやすいが、人には悪のやすりによって磨かれ、育てられる強さもある。気づかないまま自分の中でさびついていたものがあるじゃない」

「コロナは人の味覚を奪うが、これからは食べ物の味を本当に味わうことができるかもしれないし、100%の愛情のうち下手したら50%くらいしか使っていなかったのを、コロナ明けからは70%くらい使って他者に接することができるようになるかもしれない。そうなったら人間の勝ちだ。それがニューノーマルになってほしい」

やすりで心が削られてさきくれてしまうのか、さびを落として人を深く愛せるようになるのか。あなたはどちらですか。